

景観と音環境からなる風景の印象評価語に関する研究

鏡田 浩之

現在、環境意識の高まりや生活様式の近代化に伴うプライバシー意識の変化などから、景観や音環境に対する人々の意識も変化を見せている。これまで、景観や音環境を対象として、人々が実際に何を感じ取り、どういった印象を抱くかといった視点から、さまざまな研究が行われてきたが、景観と音環境は相互に影響を与え合っており、それぞれを個別に扱うのではなく、両方を含んだ「風景」として捉えることが重要であると考えられる。

しかしながら、これまで景観や音環境に関する環境評価の研究では、景観と音環境の両方を考慮したものはあまり見られず、また、特定の地域だけでなく、広くさまざまな環境を対象とした研究例もほとんどみられない。そこで本研究では、景観と音環境の両者を合わせたものを風景と定義し、さらに都市近郊、郊外、農村、森林や河川など 25 種類のさまざまな風景を評価対象とした。

また従来、景観や音環境の評価を行う際には、SD 法による実験が多く行われ、通常印象評価に用いる尺度は実験者側が用意していた。この場合、評価者が実際に感じていることと、用意された評価尺度との間にずれが生じてしまうという問題点が指摘される。そこで本研究では、評価グリッド法(レポートリーグリッド発展手法)と呼ばれる手法を採用し、印象評価に用いる尺度を評価者自身の言葉から抽出することを試みた。

本研究ではまず、風景を構成する景観と音環境それぞれに対する評価語について調べるため、風景を景観(映像刺激)と音環境(音声刺激)に分け、視覚実験と聴覚実験を行った。それぞれの実験では、刺激を”最も望ましいもの”から”最も望ましくないもの”までの 5 段階のうちどこに当てはまるかを実験参加者に評価してもらった。5 段階に分けられた各群の刺激について、他の群の刺激と比較してより望ましいと評価した理由、および望ましくないと判断した理由を尋ね、実験参加者が回答する際に使用した言葉をもとに、評価語を抽出した。続いて、得られた評価語に対し、より上位の評価項目と下位の評価項目を抽出するラダーリングを行った。以上より、景観に対する 122 個の評価語と、音環境に対する 92 個の評価語が得られた。得られた評価語のうち出現頻度が多いものに「望ましい⇔望ましくない」の評価語を加え、各評価語について 7 段階 SD 尺度を作成した。

作成した尺度を用いて、風景として視覚刺激と聴覚刺激を同時に呈示し、風景の印象評価実験を行った。得られたデータをもとに、風景を分類するためクラスター分析(Ward 法)を行った。その結果、風景は、森林、農村、河川などの風景が含まれる「自然・田舎的風景」と、市街地や都市などの「都会的風景」の 2 つのグループに大きく分類された。さらに、風景の印象評価における評価語の因子構造を検討するため、因子分析を行った。その結果、風景を評価する際の因子として、「望ましさ因子」、「安心感因子」、「地域性因子」、「来訪性因子」の 4 因子が抽出された。

続いて、因子分析で得られた各風景の因子得点を実験参加者数で平均を取り、その値(因子得点の平均値)をもとに風景の特徴について検討した。その結果、「自然・田舎的風景」では「都会的風景」よりも、より望ましさ、より安心でき、より田舎的であり、より行ってみたいと評価されていることが分かった。また、音環境に関する評価項目はすべて風景の総合的な評価、すなわち「望ましさ」に強く関与しており、風景評価の際、景観だけでなく音環境もまた非常に重要であることが示唆された。(環境行動学)